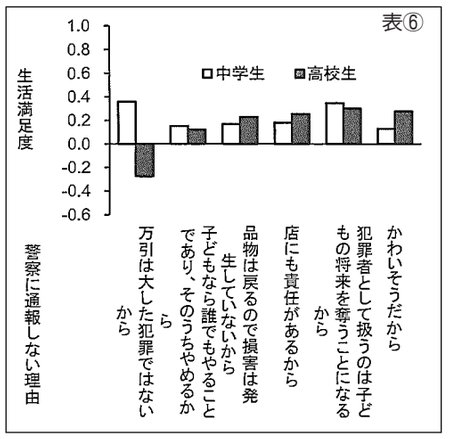
樋口建史万防機構監事



%、中学生9・2%、高校生10・0%)。

この設問の選択肢は、保護者視点から「子ども個人を考える」のか、「子どもとの関係を重視する」のかとの軸(個人重視/関係重視)に加え、「子どもの現在を重視する」のか、「未来を重視する」のかの軸(現在重視/未来重視)からなる4つの象限に割り当てた。結果を見ると、現在/未来の比較では、小中高ともに未来重視を求める傾向がある。また、個人/関係については、小中では個人重視を求める傾向があるが、高校になると関係重視も求める傾向が見られ、保護者に求める関係性に違いが見られる(表⑦)。

また、この項目については男女差が見られ、「よく話す」ことで万引を起こさないと考えるのは、小中高を通じて女子が顕著に高い(小学生女子41・5%/男子35・9%、中学生女子37・7%/男子33・4%、高校生女子42・2%/男子38・4%)。また、自分の保護者に対する満足度についても、肯定的に答えるのは女子の方が高かった(小学生女子80・0%/男子76・1%、中学生女子64・9%/男子56・3%、高校生女子64・0%/男子54・3%)。男子生徒より女子生徒の方が、自分の保護者と話すことを求めており、実際の行動に移しているため、保護者に満足しているのかもしれない。

中高生のみを対象に、万引をした子どもやその保護者はどのような償いをするべきだと思いますか。ひとつだけ選んでください=①万引は大した犯罪ではないので、その場で謝罪すればよい②万引をしようとした商品を買い取ればよい③商品を買い取るだけでなく、迷惑料などを払うべきである④商品を返して、店の掃除や手伝いなど、店への奉仕をするべきである⑤商品を返して、ボランティア活動に従事するなど、社会貢献活動をするべきである⑥特に何かをする必要はない

最も多かったのが「商品を買い取るだけでなく、迷惑料などを払うべきである」で中学生32・2%、高校生27・4%。以下は中学生と高校生で順番が異なり、中学生は「社会貢献活動をするべき」(21・2%)、「買い取ればよい」(18・9%)、「店への奉仕をするべき」(16・4%)、「謝罪すればよい」(7・2%)の順。高校生は「買い取ればよい」(21・2%)、「社会貢献活動をするべき」(20・2%)、「店への奉仕をするべき」(18・1%)、「謝罪すればよい」(7・0%)と続く(表⑧)。

この設問については、万引寛容群/万引非寛容群とグループ分けした上で、償い方に応じてレベル分けを実施。それを見ると、生活満足度と一定の関係があることが見られ、生活満足度が高いほど、償い意識のレベルも高くなると言える。日々の生活意識の満足と規範意識の向上には、一定の関係があると考えるべきとの見解を示した(表⑨)。

あなたは子どもが万引をしなくなるためにはどうすればよいと思いますか。もっとも効果があると思えることをひとつだけ選んでください=①万引について学校の授業でとりあげる②保護者は子どもが万引をしないようにしつける③警察が積極的に取り締まるようにする④万引(窃盗)の刑罰を重くする⑤テレビで万引に関する番組を放映する⑥万引しにくい店づくりをする⑦店は万引をした子どもやその保護者から罰金、迷惑料などをとる⑧中古品を買い取る店は、万引した製品かどうかをきちんと確認する

結果は小中高でばらつきがあり、小学生は「万引について学校の授業でとりあげる」と「万引しにくい店づくりをする」が同率で最も多く23・1%。以下、「警察が積極的に取り締まる」(14・0%)、「万引(窃盗)の刑罰を重くする」(13・8%)、「保護者は子どもが万引をしないようにしつける」(10・5%)。

中学生で最も多いのは「万引について学校の授業でとりあげる」25・7%で、以下「店づくり」(24・7%)、「保護者がしつける」と「刑罰を重くする」(14・2%)、「警察が取り締まる」(9・2%)。

高校生は「万引しにくい店づくりをする」が最も多く22・6%、以下「保護者がしつける」(20・5%)、「学校の授業でとりあげる」(20・2%)、「刑罰を重くする」(17・5%)、「警察が取り締まる」(9・5%)。

ここでは選択肢を「直接的な予防措置」、「啓発的な対策」、「懲罰的な対策」の3つに分類。中高生は共通して「直接的な予防措置」よりも「懲罰的な対策」よりも「啓発的な対策」の方が効果的だと見ており、教育的な対応に高い効果を期待する向きが多い。一方で、店舗側の対応については余り期待していない。

中高生のみを対象に、店は万引をさせないための取り組みをしていますが、この中でもっとも効果的だと思う取り組みをひとつだけ選んでください=①万引防止ポスターを貼るなど、万引対策をしている店であることをアピールしている②「いらっしゃいませ」などの積極的な挨拶や、「何かお探しですか」などの声かけをしている③店内に監視カメラやミラーをつける④商品を店外に持ち出さないための万引防止機を設置している⑤私服警備員が巡回するなどの監視をしている⑥マイバッグを店内で広げないルールを作っている⑦万引をすべて警察に通報している

対策への問いには、中高生ともに「万引防止機の設置」が最も多く、中学生32・8%、高校生34・8%。以下「監視カメラやミラーの設置」(中学生24・0%、高校生22・5%)、「挨拶、声かけ」(中学生22・4%、高校生20・7%)、「警備員の巡回」(中学生9・3%、高校生9・0%)(表⑩)。

「威嚇的対策」と「間接的」対策に分けると、7割弱が「威嚇的対策」に効果があると考えている。ただし、この回答は万引をする人のことを想像しての回答なので、実際に効果的な対策と照合することで、立体化した見方をする必要がある。

これも中高生のみを対象に、学校や警察などは、万引防止のための取り組みや制度を整備していますが、この中でもっとも効果的だと思うものをひとつだけ選んでください=①学校は、生徒に「万引は犯罪であること」を指導し、万引した子どもに対しては万引を繰り返さないための指導をしている②警察は万引した生とについて、学校に連絡している③本やCDなどの中古品を買い取る店は、中古品を売りに来た18歳未満の者に対して、保護者と一緒に来るように求め、または保護者に電話して確認することを徹底している

最も多いのは「学校での指導」で中学生59・5%、高校生53・4%。以下「警察が学校に連絡」(中学生24・3%、高校生34・3%)、「中古品買取店が保護者に確認」(中学生14・2%、高校生10・5%)。

多くの中高生が、学校を非行防止に有効な教育の場と考えている。男女差で見ると、学校に期待するのは女子が多く、警察に期待するのは男子に多い傾向が他の項目でも見られる。

近年、少年の規範意識低下が言われるが、過去調査との比較で大きな変化は見られない。規範意識を問題視する場合、生活満足度など別の要素との関係で捉えていく必要がある。個人的希望とした上で、逸脱した者への質的研究を行う方が問題が見える可能性がある。また、人間の関係性や生活満足度が各々の学生の中で向上していく対策が、根本的対策として有効との見解を語った。

そして、樋口監事(前警視総監)が報告書に関する感想を述べるにあたり、安全で安心な社会づくり全般について、犯罪発生件数がピークだった平成14年から十年間の取り組みなどについて紹介。その中で万引防止関連対策に関しては、万引被害に遭う店舗、万引に手を染める少年や高齢者、それぞれの地域社会にとっても、社会の活力を損なうものであってはならないと思うと語った。

また、犯罪対策についても、安全安心には値段を付けられないかもしれないが、できるだけ少ない社会的コストで高い成果を上げることが求められるのではないかとして、犯罪対策であってもできる限り効率の良い対策、推進方法を選択する必要性を指摘。そうした観点で見た場合、本件の調査結果の分析は万引防止対策の実効性を高め、より効率的な推進を図る上で示唆に充ちたものであり、その意義が非常に大きいと評価。そして具体的にどのような対策を講じるべきかについては、こうした基本的な考え方に即して検討して選択するとした。

警察の立場では犯罪抑止と犯罪捜査の関係では、犯罪抑止が優先されるべきものだと考えるとした上で、万引も含めて犯罪というものは一度発生してしまうと、心の傷は勿論、経済的損失さえ100%の被害回復は不可能。被害者だけでなく行為者も不幸となるので、抑止できる犯罪はできる限り抑止することに力を注ぐべきである。

犯罪抑止対策として、1つは高い規範意識と地域社会における強い絆を育む対策が必要。具体的には万引防止対策、自転車総合対策、駅構内など公共空間における小さな暴力の撲滅対策の3つを示した。小さな犯罪や違反を安易に見過ごさない。見咎めるべきはきちんと見咎める。たかが万引といった風潮を社会から一層しようということで、警視庁ではこれらの対策を並行して進めている現状を紹介。2つ目は、社会の中で孤立し、疎外感を抱く人々への支援対策。その例として独居高齢者などを上げ、犯罪被害に遭う可能性が少なくない被害者適格性に加え、犯罪に手を染める可能性のある行為者適格性も認められる。そのため、今後より安全で安心な社会を目指すためには、こうした方々に対する社会的支援が必要で、「出前型支援」の必要性を紹介した。

今回の調査結果の分析は、行為者に着目した分析なので、青少年の非行防止や健全育成に資するとともに、万引抑止対策にも大いに資するとの感想を述べた。

戻るので損害は発生していないから④店にも責任はあるから⑤犯罪者として扱うのは子どもの将来を奪うことになるから⑥かわいそうだから

結果は「犯罪者として扱うのは子どもの将来を奪うことになるから」が最も多く、中学生59・0%、高校生58・4%(前回調査では、中学生37・5%、高校生42・1%)。

「犯罪者として扱うのは子どもの将来を奪うことになるから」との回答が圧倒的多数を占めた回答結果を踏まえ、見方によっては万引を警察沙汰にすると本人のためにならないので、穏便な解決策を模索するべきだといった優しい気持ちに受け取れる。つまり、「そう思わない」と答えた大半には、社会規範に抗っている訳ではないとの意識が垣間見られる。

「万引は大した犯罪ではないから」との回答は少なかったものの、回答者の生活満足度を見ると中学生は0・36と高い一方、高校生はマイナス0・28。一般的な選択肢と異なる回答者の生活満足度を見ると、中学生は生活満足度が低く、高校生は高いという傾向があるが、この設問では中学生の生活満足度が高くなっている(表⑥)。この点に対して奥田准教授は推測としながら、中学生は「中二病」と呼ばれる根拠のない全能感を持ち合わせやすいため、万引は世間的にダメだと言われているが、本当は悪くないのではといった考えを持つ向きが「万引は大した犯罪ではないから」を選んだ。一方、高校生は余り満足していないことに加え、万引は犯罪という意識を持っていないため回答傾向が異なったとの見方を示した。

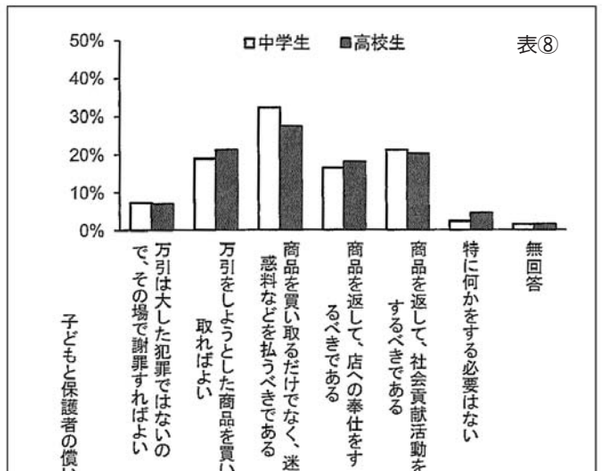
(今回の調査から新たに加えた設問)

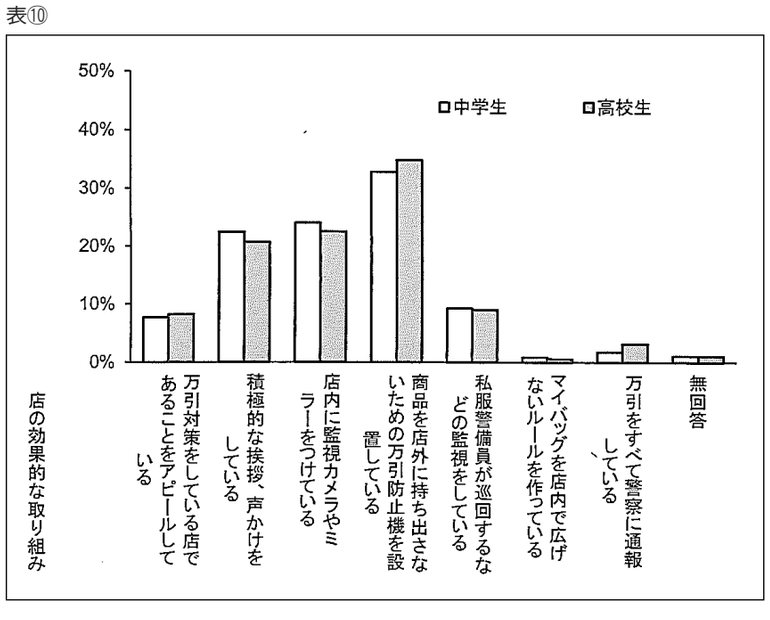
保護者は子どもが万引などの犯罪行為をしないようにするために、日頃から子どもとどのように接すればいいと思いますか=①子どもが間違ったことをしたらすぐに注意する②何でも子どもの言うとおりにする③子どもを大人として対等に扱う④子どもとよく話すようにする

最も多かったのは「子どもが間違ったことをしたらすぐに注意する」で、小学生54・2%、中学生53・5%、高校生48・2%。以下「子どもとよく話すようにする」(小学生38・7%、中学生35・4%、高校生40・3%)、「子どもを大人として対等に扱う」(小学生5・1

	関係重視	個人重視	
	対等に扱う	すぐ注意	未来重視 計
未来重視	小 5.1%	小 54.2%	小 59.3%
	中 9.2%	中 53.5%	中 62.7%
	高 10.0%	高 48.2%	高 58.2%
	よく話す	言う通りに	現在重視 計
現在重視	小 38.7%	小 0.6%	小 39.3%
	中 35.4%	中 1.0%	中 36.4%
	高 40.3%	高 0.7%	高 41.0%
	関係重視 計	個人重視 計	
	小 43.8%	小 54.8%	
	中 44.6%	中 54.5%	
	高 50.3%	高 48.9%	

表⑦



表⑨

	グループA(万引寛容群優位)	学外活動の満足度平均(中学生)	学外活動の満足度平均(高校生)
レベル0	特に何かをする必要はない	0.34	-0.51
レベル1	万引は大した犯罪ではないので、その場で謝罪すればよい	0.36	-0.65
レベル2	万引をしようとした商品を買い取ればよい	0.41	-0.57
	グループB(万引非寛容群優位)		
レベル3	商品を買い取るだけでなく、迷惑料などを払うべきである	0.56	-0.50
レベル4	商品を返して、店の掃除や手伝いなど、店への奉仕をするべきである	0.61	-0.48
レベル5	商品を返して、ボランティア活動に従事するなど、社会貢献活動をするべきである	0.54	-0.41